

この連載を開始して1年半近くが経過した。わが国の建設需要が減り続けていると当初から不安を煽りながらここまでできてしまった。そこで責任の一端を担うべく、建設需要の将来を予測することにより連載の幕引きとしたい。

とはいえ、理論を積み上げて建設需要がどうなるかを予測するのは筆者の手にあまる。そこで、今月号と来月号で、簡単に手に入るデータを駆使することにより当たらずといえども遠からずの予測を試みたいと思う。

幸いなことに(?)、建設投資の変遷に関してはわが国は世界のトップランナーではない。西ヨーロッパの先進国を追いかけている状況である。地形や自然環境、人口密度などによる差異はあるにせよ、しょせんは同じ人間の営みである。これらの国々のセメント消費量の変遷をたどることにより、わが国の将来をある程度予測ができるのではないかと思った次第である。

減少傾向にあるセメント消費量がさらにどこまで落ちるかを予測するてっとり早い方法は、先行事例を参考に、消費量のピーク値か



Joker 2号 大内雅博の

当たらずとも
いえども
遠からず 連載

正会員 大内雅博 OUCHI Masahiro (高知工科大学准教授)

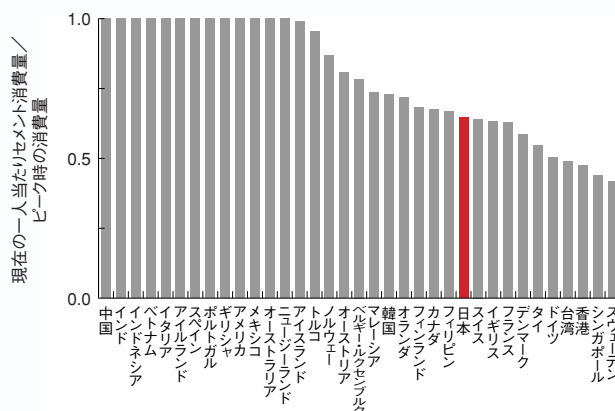
ら現在までどの程度にまで落ち込んでいるかを観察することであろう。そこで、欧米先進国とアジア主要国について、一人当たりの年間セメント消費量のピーク値に対する、2005年現在の消費量の割合の比率を求めて比較した(図-1)。

中国、インドやベトナムなどアジアの発展途上国の比率が軒並み1.0であるのは現在も消費のピーク値を更新中であるからと納得できるが、アメリカやイタリア、スペイン、オーストラリアといった先進国でも記録を更新中であるという事実には驚く。

さて、わが国の比率は0.646である。今回登場した国々のなかで最低の比率はスウェーデンの0.418であるから、現在の一人当

たり消費量はピーク時の4割強にまで落ち込んでいることになる。わが国でも少なくともこの比率までセメント消費量が落ち込むとすると、1973年に715 kg/人あったセメント消費量の4割、300 kg/人程度にまで落ち込むことを想定しなければならないということか。2005年のわが国の消費量は462 kg/人であるから、あと150 kg/人程度の減少である。

とはいえ、もっと大事なことは、何年かかって消費のピーク値からここまで落ちるかということである。図-1の各国の比率にあわせて、ピークから現在(2005年)までの経過年数の関係を図示してみた(図-2)。比率が1.0の国々は当然のことながら現在も記録更新中



建設需要は どこまで減るのか？

であるから経過年数も 0 となる。

一方、欧米先進国については、経過年数と比率とには大まかな相関関係がありそうである。わが国もこの相関関係のなかに含まれている。

しかし、10 年弱の経過年数で比率が幅広く分布しているアジア諸国は、1997 年の通貨危機前後の建設需要の乱高下などが影響しているものと思われる。ピーク値というものは本来不安定なものである。これを基準として将来を論じることが避けたいという気がしてきた。

そこで見方を変えて、現在の年間セメント消費量と、その年までの累積消費量との比率に着目してみた。社会基盤施設や建築物は一度

建設されたら数十年間にわたって使用されるものであり、過去の投資の蓄積（だから「ストック」と呼ばれる）が現在の投資量に大いに影響すると考えたからである。

第二次世界大戦中の 1939 ～ 1946 年までを除いた、データのある 1920 年から 2005 年までの各国のセメント消費累積量に対する現在（2005 年）の年間消費量の比率を求めて、多い順に並べてみた（図-3）。

一番多いベトナムは約 13 %。すなわち、現在の量に対して、1 年間で 1 割強のコンクリート構造物や建築物が増えていることになる。中国も 9.5 % と比較的高い比率となった。昨今の上海や北京のみならず大都市の建設ラッシュを見ればな

るほどと納得できる数字である。

一方、最低値はスウェーデンの 1.3 % である。これまでのストックに対して昨今は年間 1 % 強しか新しい構造物や建築物が増えてないわけである。わが国の比率は 1.9 %。スウェーデンとの間にはわずかにフランス、デンマーク、イギリス、ドイツしかなく、先進諸国のなかでも低いほうになってしまった。

いずれはスウェーデン並みの比率になる可能性がありそうだとはいえ、問題は、何年かかってこの値になるかということである。そこで、今回は手はじめにわが国における累積セメント消費量に対する年間消費量の推移の変遷を求めてみた。縦軸は対数目盛りである（図-4）。

戦争の影響を除外すれば、1930 年当初からピーク時の 1973 年まではほぼ一割で推移し、その後コンスタントに下がり続けて今日に至っている様子を観察することができる。割合にきれいな傾向である。

データ出典
CEMBUREAU : World Cement Market in
Figures 1913/1995

（資料提供：（株）セメント新聞社）

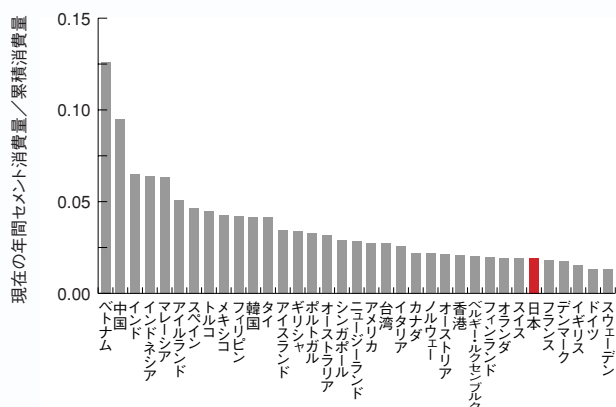


図-3 累積セメント消費量に対する現在（2005 年）の年間消費量の比率

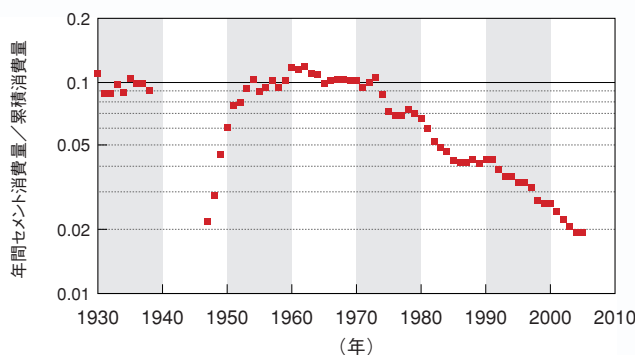


図-4 わが国における累積セメント消費量に対する年間消費量の比率の推移

（キャラクター＆外枠デザイン：宇野洋志城）